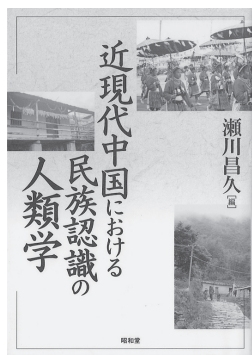


瀬川昌久編

近現代中国における 民族認識の人類学

昭和堂／2012年1月／296頁／4725円



河合洋尚

本書は、二〇〇五～二〇〇九年度東北大学東北アジア研究センターの共同研究「中国の民族理論とその政策的実践の文化人類学的検証——中華民族多元一体構造論を中心に」、ならびに二〇〇七～二〇〇九年度科学研究費補助金（基盤研究(B)）「中国の民族理論と民族間関係の動態——文化人類学的視点からの検証」（いずれも代表者・瀬川昌久）による研究成果である。総じて、文化人類学の立場から中華民族多元一体構造論（以下、多元一体論と略称する）の学術的意義を再評価し、近現代中国を対象とする民族誌的研究に新たな視野を提示した論文集となっている。

多元一体論は、中国人類学界の泰斗として知られる費孝通が、一九八八年に提唱した概念であり、中国の民族問題を扱う多くの研究領域に影響を与えてきた理論である。その理論の核心は、中国という国家領域内部に存在する多数のエスニシティ集団が、国家の制定する五六の民族に帰属し、さらに、その五六の民族が中華民族という上位の民族に帰属すると

いうものである。費孝通は、中国の諸民族（漢族と少数民族）は、数千年の時を超えて融合・分化をおこなってきたため、互いに不可分な民族実体（＝中華民族）が中国で形成されてきたと主張した。こうした民族間関係について、費孝通は「我中有你、你中有我」（我の中に君あり、君の中に我あり）と表現しており、中国の民族が多様でありながらも、国内で一体構造をつくりあげてきた様相と実態について論じた。

しかし、多元一体論は、中国という政治空間と中華民族とを一致させているがために、しばしば政治的な概念であると批判されてきた。特に、国境を跨ぐ少数民族を考えると、なぜ同一民族でありながら、中国の領域内にいる民族だけが中華民族として別個に区別されているのかという問題が浮上する。また、中華民族と呼べるほどの一体感を中国の各民族が有しているのかという問題も、しばしば指摘されてきた。特に近年では、中国政府が多元一体論を支持し、民族政策の一環に組み入れているため、それは、政策

迎合的な多民族（文化）主義思想として解釈されることも少なくない。

こうした多元一体論と国家ナショナリズムの結合については、本書でも折に触れて論じられている。しかし、本書は他方で、多元一体論を政策的アプリケーションとしてのみ捉えることには否定的であり、むしろ多元一体論に込められている学術的価値に着目し、それを再考することで、中国民族研究の進展を図ることを目的としている。編者である瀬川昌久は、第一章で、現代人類学の視点から、多元一体論の学術的価値を再評価している。そのうち主要な議論は、以下の三つに要約できる。

- (1) 費孝通が国家領域と中華民族とを一致させているのは、あくまで便宜的な措置である。費孝通が強調しているのは、中国国内の民族が多層的な構造をなしているという点であり、この見解は、氏がヤオ族やイ族などでおこなった自身の民族調査に由来する。

(2) 費孝通は、漢族と少数民族が長年

の月日を経て融合・分化を繰り返してきたと主張しているが、この議論のなかには、民族を固定的に捉えず、民族が時代ごとの諸条件により生成・更新される側面を捉えている。すなわち、フレデリック・バルトがエスニック・バウンダリー論で論じた民族境界の可変性と状況依存性の議論が、多元一体論にも形を変えて現れている。

- (3) 費孝通は、比較的長期の分離・融合を通して形成された自然発生的な民族集団（自在的民族実体）と、西洋との接触により自民族としてのアイデンティティを獲得した意識的な集団（自覚的民族実体）とを区別している。この二つの民族実体の別は、民族の「客観的」分類や主観的意識を問う近年の理論的動向とつながる可能性をもつ。

そのうち、(3)の理解については、ステファン・ハレルによるイ族の研究が参考になる。ハレルは、言語も習俗も異なる複数の集団が、西洋の宣教師らによる

「客観的」な学術表象により一括りにされ、それをベースにイ族という自己意識をもった民族実体が形成されていく過程を論じたことがある〔Harrell 1995〕。この議論は、角度を変えてみれば、自在的民族実体から自覚的民族実体へと転換していく過程を論じたものとも言えるだろう。ただし、瀬川は、多元一体論が民族意識の問題に深く触れていなかったことも同時に指摘しており、むしろ、民族意識の問題を本書の考察に加えることで、同理論の不足を補っている感がある。

瀬川が第一章で論理的に示した多元一体論の学術的価値、特に(2)「民族境界の可変性・状況依存性」、および(3)「自覚的民族実体の創出」の二点は、本書の主要な枠組みになっており、続く第二章から第九章にかけて具体例をもって示されている。

まず、費孝通が「我中有你、你中有我」とも称した民族境界の可変性については、曾士才(第二章)や塚田誠之(第三章)らにより論じられている。彼らの研究は、いずれも漢族と少数民族の間の

相互関係について述べたものである。

まず、曾論文が対象とするのは、貴州省の黔东南苗族侗族自治州における、少数民族の宗祠再建活動である。曾は調査を通して、明代以降に移住してきた漢族の子孫が、移住先である貴州省のフロンティアでミャオ族やトン族を名乗っていることを発見した。他方で、曾は、移住先の貴州省で少数民族となった子孫たちが宗祠を建設し、漢字で書いた位牌を安置しているが、これは漢族としての身分を示す指標ではなく、中華民族としてのステータスを強調したものであると指摘している。

非漢族地域に移住した漢族については、塚田論文も、広西チワン族自治区の蔗園人を事例に述べている。塚田によると、蔗園人は、秦・漢代以来、北方から移住した平話人の下位集団であり、漢族に属する。しかし、蔗園人には、「十兄弟」や「十姉妹」という若者間の相互扶助組織など、他の漢族とは異なる習俗が見られる。塚田は、この習俗が近隣の客家村にはなく、チワン族の「ホージー」

習俗と重なることから、蔗園人へのチワン族文化の影響について論じている。

曾論文や塚田論文が論じている漢族／少数民族間の振幅については、第七章の瀬川論文など、他のいくつかの論文でも随所に見られる。ただし、本書のより多くの論文は、自覚的民族実体としての中華民族の創出にまつわる事例について考察を進めているように見える。

そのうち、上野秘弘(第九章)は、費孝通の多元一体論へとつながる前景、および後の学術的・政策的影響について述べている。前者については、中華民族凝縮論など多元一体論の拡大解釈を論じている他、後者については、冒頭でも論じた民族政策への迎合を描き出している。

続いて、長谷川清(第六章)と菊池秀明(第八章)は、民国期以前の民族ナショナリズムに着目し、具体例でもって、中華民族を創出しようとする当時の「萌芽的」過程を示している。

まず、長谷川論文は、雲南省徳宏州における学校教育に焦点を当てており、タイ族に「漢化」教育を施すことで、自覚

的な中華民族を創りあげていく過程を考察している。長谷川によると、近現代中国の辺境少数民族地域では、学校教育を通して漢族と共通するイデオロムを教えることで、周辺の諸民族を中華民族に統合する試みがなされてきた。ただし、民国期の教育制度が同化を前提としていたため、徳宏州のタイ族地区では多くの問題が噴出していたことを、長谷川は指摘している。

次に、菊池が対象としているのは、漢族の下位集団に属する客家である。太平天国の乱の「主役」であった客家は、一九世紀当時、自分たちこそが中華文明の後継者であると考える中華ナショナリズムを展開した。だが、太平天国は、他方でキリスト教の信仰の有無を基準に華夷を判断しており、また、モンゴル族を夷とする「小中華」ナショナリズムも併せ持っていた。それゆえ、客家のナショナリズムは両者の間で揺れ動き、長谷川論文の事例にも示されているように、民族実体としての中華民族としての自覚は、まだ「萌芽的」な段階に留まっていた。

客家の事例は、第七章の瀬川論文でも描写されている。瀬川は、民国中期から百年近くの歴史について考察をなし、民国期の客家エリートが、客家の中の多様性を無視して、ひたすら中華文明の中心としての自己像を描いてきたことを、まづ指摘している。しかし、一九八〇年代以降、客家の一部がシオオ族としての身分を主張し、また、客家地域内部の各地方文化の主張と相俟って、客家内部の多様性が重視されるようになった。瀬川は、これらの事例を通して、客家の内部における多元一体構造も示している。

現代中国における中華民族の創出や帰属については、西澤治彦（第四章）と松岡正子（第五章）でも論じられている。まず、西澤論文は、回族コミュニティの分析から、回族アイデンティティの抛り所について論じている。西澤が主張するように、近年の中国では、都市開発により回族のコミュニティが解体の危機を迎えており、また伝統的には、回族というアイデンティティを支えてきたのは西アジアの出身という民族性とイスラーム教

徒であるという宗教性であったが、地域によっては、回族がこれらをアイデンティティの抛り所とするのは難しくなっている。西澤の指摘によると、そこで新たなアイデンティティの抛り所となったのが中華民族の一員であるという戸籍上の身分であり、その意味で、回族に関しては多元一体論のモデルとすでに親和性をもっているのだという。

西澤の事例と同様、松岡論文が対象とするチャン族も、中華民族の一員としての位置を獲得し始めている。ただし、松岡論文で示されている中華民族文化の一系統のチャン族文化は、外部によって押し付けられた紋切型のモデルである。松岡は、震災後の四川省汶川県で、チャン族が夏王朝の始祖である大禹の子孫であることが主張され、この見解に基づき都市建設が進められてきた事実を指摘している。さらに、学者は、チャン（羌）族と大禹（漢）を結びつけた羌禹文化を「科学的」に提示し、開発の前提としてきたが、この文化は、一部の地域をモデルにしていたため、多様なチャン族文

化と齟齬を生じるようになったのだと指摘する。松岡論文は、多元一体論の枠組みにおける「政治文化」の創出だけでなく、その枠組みから漏れる多様な「生活文化」の存在も提示している点で示唆的である。

本書は、このように多元一体論を文化人類学や民族学の観点から継承・発展させることで、中国社会を解説する視点を提示したものである。以上の各章を見れば分かるように、本書の議論は、単に費孝通の議論を解題し消化するものではなく、各々の論文が、多元一体論を手掛かりとして、中国の民族やエスニシティの研究を進めている。

本書の議論は、中国民族の諸研究に多くの啓発をもたらすものであるが、とりわけ漢族をめぐる民族誌的な事例と考察が豊富に織り込まれているため、漢族研究者には必読の一冊となっている。本書では、基本的に費孝通の漢族観を引き継ぎ、漢族と少数民族の融合や文化が中華民族を創りあげてきた側面を、具体例をもって示している。今後は、多元一体論

の漢族観を再検討し漢族／少数民族間の関係性を捉え直していく研究が必要になるかもしれないが、こうした漢族研究の進展を見据えていく際にも、本書の貢献は無視できない。他方で、本書が提示した事例と考察は、中華民族（文化）への統合を解説する研究を深めていく際、少なくとも以下の二点において貴重な糸口を与えてくれるだろう。

第一に、本書では、自覚的民族実体としての中華民族の成立を、一九世紀から丹念に追っており、民国期以前の近代中国において、中華民族のあり方が現代とは異なる「萌芽的」な段階にあったことを示している。しかし他方で、それが現代にまで連続的である側面も示唆しており、中華民族の創出の議論に、清末・民国期への考察が欠かせないことを教えてくれる。

第二に、現代における中華民族の創出には、各民族による差異が見受けられるが、国家により認定された五六の民族の下位に、さらに多様なエスニシティ集団がカテゴリー化され始めていることが分

かる。特に、チャン族の事例においては中華民族の枠組みのなかで、チャン族文化が「科学」の言説を通して再生産されており、それが現地の社会形成や景観建設などに大きな影響を及ぼすようになっている。

こうした中華民族の創造のあり方は、例えば、筆者が調査対象とする広東省の漢族の事例にも適用することが可能である。まず、広東省の漢族は一般的に、広府人、潮汕人、客家の三系統に区分され、いずれも中華民族を構成するエスニック集団であるとみなされている。この三つのエスニック集団は、清末から民国期にかけて民族実体として成立するようになり、さらに一九九〇年代以降、科学言説により、広府文化、潮汕文化、客家文化という固定的な「政治文化」が提示されるようになった。また、これらの文化は、チャン族文化の事例と同じく、やはり一部の地区を全体化するものであったので、住民の多様な「生活文化」と乖離するようになっていく [Kawai 2012]。このように、本書は、中華民族

およびその文化のポリテクスを解説するいくつかのモデル・ケースを提示してくれている点で、非常に示唆的であると言える。

さらに、本書は、中華民族の多様性の文法を理解する助けとなるだけでなく、費孝通の多元一体論をより抽象化して理解を促す手掛かりを与えている。人類学一般において、中国研究は他地域との対話に欠ける傾向にあるため、他地域の研究者には理解しづらい概念や理論が多い。そのため、本来ならば地域を超えた貢献ができる可能性を秘めているながら、他地域の研究者、ひいては中国研究を志す研究者にさえ、その意義が理解しにくいこともある。そのなかで、本書は、多元一体論という中国研究に閉じた議論を、現代人類学の観点から再検討を加えたうえで「翻訳」している点で、重要な意義をもっていると言えるだろう。今、中国の人類学的研究で使われているいくつかの用語は、その意義をより抽象化して説明するよう「翻訳」される必要がある。今後、中国社会の人類学的研究に従

事する我々若手研究者は、中国「特有」の用語や理論を「翻訳」し、それを他地域の研究に投げかけていく作業が求められるであろうが、本書はこうした方向性の先駆的な業績となりうる可能性を秘めている。

参考文献

- Harrell, S. 1995 "The History of the History of the Yi," in S. Harrell (eds.) *Cultural Encounters on China's Ethnic Frontiers*. Seattle and London: University of Washington Press, pp. 63-91.
- Kawai, H. 2012 "Creating Multiculturalism among the Han Chinese: Production of Cantonese Landscape in Urban Guangzhou," *Asia Pacific World*, 3(1): 39-56, International Association for Asia Pacific Studies, New York and Oxford: Berghahn.